

## 国際バカロレア「知の理論」と専門導入科目「知識情報概論」の内容比較

糸井 晴夏

現在、日本の小・中・高校の教育課程においては、教科書の内容を暗記し、理解してその達成度を 100 点満点のテストによって測定するという手法が多く取られている。しかしそれに順応した「知識の取得方法」は、大学における高等教育とは大きなギャップがある。高等教育においては、それまで常識として学んできた事項や理論、手法を、本当にそれは正しいのかと疑い、その根拠を思考する「批判的思考」が求められる。それはいわゆる「主体的な学び」とも言われ、それまでとは異なる「知識の取得方法」を指すものである。そのギャップを埋めるためには、高等教育においてより高度な「知識に関する学び」が提供されることが望ましい。だがそれは、思考力、論証力といった、規定し評価することのすることの難しい能力である。

そこで着目するのは、国際的な教育プログラムとして昨今注目を集めている「国際バカロレア(International Baccalaureate・IB)」。その中でも特に、16~19 歳を対象としたディプロマプログラム(Diploma Programme・DP)のコア科目(必修科目)に位置づけられている「知の理論(Theory of Knowledge ・TOK)」である。これは、既存の日本における教育課程で多くみられる具体的な知識を学び習得する形式ではなく、「わたしたちは知っていることをどのように知るのか」という知識に関する根源的な問いを探究する科目である。すなわち、国際的に規定された「知識の取得方法」と言える。これまでも、国内外を問わず中・高校の教育課程においてその有用性が検証され、その問題点も多く指摘されている。本稿では、その問題点を加味した上で、今後の大学における教育課程において、科目として成立させるために、筑波大学 情報学群 知識情報・図書館学類で専門導入科目として設定されている「知識情報概論」を元に考察する。

知識情報概論は、情報化社会に生きる人々が知識や情報を有効に活用するために必要な仕組みを学ぶ知識情報・図書館学類において、専門導入科目としての役割を担っている、知識という概念についての基礎を学ぶ授業である。本稿では、知識情報概論と前述の「知の理論」とどれほど同じ類似しているのかを、履修した生徒へのアンケート調査を実施し、測定するものである。

結果として、知識情報概論と「知の理論」の内容自体はかなり類似していると結論付けられた。同じトピックを扱っている、といて差し支えないと思われる。しかし、今回の調査では知識情報概論が学生に対し「批判的思考」を能力として習得させるに至っているのかを測定することは叶わなかった。したがって、知識情報概論を足がかりにして、高校までの「知識の取得方法」とのギャップを埋めるには、その測定方法を吟味し、その教育方法を検討することが有効な手段であると言えよう。

(指導教員 宇陀則彦)